
Somewhere, Sometimes

桃居奈央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S o m e w h e r e , S o m e t i m e s

【NZコード】

N 5 1 2 1 D

【作者名】

桃居奈央

【あらすじ】

「ここにはないの、私の居場所」そう言って、彼女はあっさり学校を辞めてしまう。そんな彼女と、元クラスメートの彼が、そのかわりのなかで摸索していく彼らの「居場所」とは。。。

空は、どこまでも突き抜けていきそうな青だった。放課後の中庭には、他に誰の姿も見えない。彼女が足下の小石を軽く蹴飛ばし、目の前の深緑色の小さな池の中に、石は、ぽおんと音を立てて軽い放射線を描きながら飛び込んだ。顎のラインあたりで切りそろえられた彼女の髪が、突然後ろから吹きつけてくる風にあおられてその白い無表情な顔を一瞬隠すと、彼女はぐっと眉をしかめて、白い指で髪の毛をかきあげた。

「東条さん？」

背後から声がして、彼女が右肩越しに振り返る。その瞳は確かに彼をとらえているけれど、その表情は変わらない。

「ああ、永野くん」

そう言つたきり、またふうっと顔を元の方向に戻してしまつ。

「ごめん、話しかけて、迷惑だったかな」

「別に、何かしてるわけじゃないし」

今度は振り返らないままそう答えた彼女の左側からの風が遮られ、彼が隣に同じように立つた。彼女の左肩と、彼の右腕が、触れそうで触れない距離を保つていて。

「東条さん」

「なに？」

「どうして学校辞めちゃうの？」

彼女は軽く左側に首を傾けて、彼を見上げた。彼の自分をまつすぐにつめる目線と自分の目線がぶつかっても、やっぱりその表情は変わらない。

「永野くんは、どうして辞めないの？」

「そんなこと、そんな挑むような瞳をして聞かれても、

彼の目元が緩んで、その口元に微笑みが浮かぶ。

「辞める理由、僕にはないから、かな」

「永野くんて

「うん？」

「優しい田をしてるんだね」

「東条さんて、そんなこと、突然言つんだなあ」

彼は微笑んだまま、ゆつくつと田を伏せて、はははっ、と笑った。

「ここにはないの

彼女は音もなく、その場にまっすぐこしゃがみこむ。

「え？」

「ここはないの、私の居場所」

一瞬の間があつて、それから、ふうっと彼は息をついた。その顔からさつきの微笑みが消えて、代わりに眉間に細いラインが見える。「そんな難しいこと、今まで考えたことなかつたよ」彼の声が、彼女の左上方からぽつりと降ってきた。

「あの、さ、東条さん」

「なに？」

「明日から学校でもう会わなくなるけど」

「うん」

「ときどき電話してもいいかな」

あんなに青かった空が、その末端からいつの間にか赤みを少しづつ強め始めていた。

「元気にしてた？」

彼の声が携帯電話^{（）}に聞こえてくるのを、彼女は明かりを消した自分の部屋の隅で聞いていた。右手で電話を持って、左手で両膝を抱えて座った姿勢で。真っ黒な闇が、真っ黒な夜の風に運ばれて、開いたままの窓から薄いオーガンジーのカーテンをゆらりゆらりと揺らしながら静かに忍び込んでくる。

「うん、まあね。永野くんは？」

「夏休み前の学期末試験がもうすぐだから、ちょっと睡眠不足かな」「勉強、がんばってるんだ」

「一応来年は受験生になるわけだし」

彼女が両膝を抱えていた左手を、伸ばして体の左側の床に着けた。とした瞬間、『ごん、』と鈍い音が暗闇を揺らした。

「いたつ」

「なに、どうしたの？」

彼女は左腕を自分の体と立てた膝の間にまさんで胸に押し付けるようにして、体を前方に丸める。

「体の姿勢を変えようと思つて左手を床に着けたら、『うっかりぶつけちゃつたみたい。多分机の角かも』

顔を歪めて、いつもより低い声で彼女が答えた。

「多分？」

「ああ、私の部屋、今真つ暗なの」

「もしかして、もう寝てた？」

彼女は短く、ふふふっと笑う。

「ううん、そうじゃなくて」

ほつ、と彼が小さく息を吐くのが電話^{（）}にわずかに聞こえると、一瞬彼女は声を立てずに微笑んだけれど、それはすぐに暗闇の中に溶けて、彼女の顔からその表情は消えてしまった。

闇がまた、カーテンを緩やかに押しながら窓から滑り込んでくる。今度は彼女が、長く息を吐いた。

「暗い方が、自分がここにいるって、その存在が感じられる気がするの」

「不思議なことを言つんだね」

彼女の唇がわずかに動いて、言葉の断片がそこからのぞきいつとしあたその時、乾いた木を叩く音がそれを遮つた。

「実穂加、起きてるんでしよう?」

ドアの外からの声に、彼女は両膝を左腕できつて抱えなおす。

「起きてるよ」

彼女の周囲で闇がざわりとざわめいた。

「お風呂もうみんな済ませけやつたから、実穂加もあまり遅くならないうちに入つてちょうだい」

「わかってる」

ドアの下の隙間から見えるかすかな光の線は、そのまま数秒2本の陰に区切られたままだつたけれど、それもやがてすうっと消えて、また一本のか細い線になつた。

「ごめん、お風呂入つちゃわないと、あの入つるそこから」

彼女は下唇をきつく噛み締めて、両膝を左腕でもつ一度ぎゅつと抱えなおした。

「うん、じゃあ、おやすみ」

彼の声が静かに低く響く。

「電話ありがと。おやすみ」

携帯電話のフリップが閉じられて、暗闇と沈黙がじわりじわりと再び彼女の周りを満たし始め、彼女は目を閉じて、そのまましばらぐ動かなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5121d/>

Somewhere, Sometimes

2011年1月20日03時23分発行